



「現代ナゴミ系考察学」

はじめに

いつ頃からこの言葉が使われ始めたのだろうか、主にクラブでプレイするDJの間で「そろそろナゴミ系の音楽なんじゃない。」とか「あいつナゴミの運曲うまいよな。」という風に用いられていたのが一般社会に派生していった



に賞めそやされていた、横文字で言うところの「カンファタブル・ライブ」と近いものがある。ま社会が複雑になり、その情勢も目まぐるしく変化するとくりや人間誰しも、ほっとできる落ち着いた場所を求めるもので、夜な夜なストレス解消だけを目的に、居酒屋で

よつなのだが、「ナゴミって何ですか。」と尋ねられると実はそのカテゴリーすら明快に答えられないのが現状である。ナゴミとはもちろん「和み」のことであり、「なごやかになる、やわらかく」といった意味で、丁度今から4、5年前

会社や上司のグチをたれてみたり、ディスコでコギヤルの尻を追っけ回しては、汗だくになって踊ってみたり、カラオケでコンパ学生の如く酒を呷ってみたりするだけでは、最早なんの問題も解決しないことに皆気づき始めてるんであ

る。多種多様の人々が一応に適合し楽しめる場所としてマーケティングされ、作られてきたそれらのプレイスポットもすでにナゴミとは決して言えない代物である。溯ること10年前、東の都辺りでは逸早くナゴミ系のクラブ「ヒテカントロブス」のB2や「クリリース・クリーク」などがお目見えした。5年前には、「モンクベリース」のワインバー、「インクスティック」のDJバーなどが同路線上にその姿を見せた。しかし仕掛けられたものの果なき、無理強されたファッションのナゴミは所詮一過的なトレンドとしてしか認知されず、ナゴミ系スポットの確立というまでには至っていない。それでは最近の事情はどうなのだろうか、というと、これがまたまたどうして、昨年ぐらいいから今年にかけてそれ系音楽やスポットが注目を集め始めたから面白い。人々のナゴミ思考がようやく提供者側と消費者側でコンセンサスを測り出したということだろうか、いや人々がここに来て本当に、心の安定を保証してくれる場所を求め始めたに違いない。

1. サウンドインボックス ラッキー田中の部屋
サントラ、ポツサ、フレンチポップス系の音楽を中心に、「アフロブルー」の月曜日を私と一緒に担当する彼曰く、現代のナゴミは「いい酒が飲める音楽」と断言する。優れたサウンドシステムを買い揃えて一人部屋で音楽鑑賞に耽

るだけでなく、愉快的仲間と集まり美味しいお酒を飲みながら会話を弾ませる、その為の要因として音楽が存在価値を持つてもいいのではないかといいことだ。そして彼は今、クラブ系のハコでそのジャンルを開拓中だ。ディスコや主たるクラブのDJといえは、大抵はゲストを盛り上げ踊らさねばならないという使命を課せられているが、優れたDJは、ナゴミ系の音楽をもちやんと選曲でき尚かつゲストをしつかり満足させられる器量を持ち合わせているという。力が作用するベクトルはダンスミュージックのそれとは異なるが、ナゴミのグルーブ作りも大変難しく、言わばナゴミはDJの立場でいうところの基礎体力だと言っている。

この手のハコでいえば、①人が踊っていないクラブは悪いクラブ音楽と言えよう。

②そういうハコで客を踊らせられないDJは悪いDJ③そんなDJがいるクラブは盛り上がりがないクラブというチャートが成立しやすいものだが、ナゴミ系が脚光を浴び出した今、こうした一般概念は一刻も早く払拭したいものだ。

2. 東京ラテンモードテラックス バラダイス山元の部屋
彼のナゴミ論はいつも空間演出が大事な要因のようだ。80年代後半あたりにアブク的に乱立した一連のトレンドスポットの中には、ナゴミめいたコンセプトを引く空間もあつたようだが、本来ナゴミとは人が商魂逞しく作務的に作るものではないという。空間作りとはハード的なものではなく、重要なのはソフトにあるとも言っている。演出しているよつて実はなんの計算もしていない。またはしっかり演出しているんだけどそんな風には見せない。あるいは誰がどんな状況で何をしているのが良かった見えぬのに、何故か心地良い雰囲気伝わってくる。そんな空間に身を挺することが、真のナゴミだというのだ。実際彼が、東京ラテンモードテラックスの活動の中で見せる、パーチャルグラウンドキャバレーショーナイトと称する豪華なステージングは、まさにその昔銀座赤坂で一世を風靡したキャバレーのムードそのものを創り出しており、そのムードたる

や実に有機的で血の通った空気を醸し出している。彼のナゴミとは世知辛く汚れた社会の空気を、ほのぼのとしたお楽しみ系の空気に清浄することに違いない。

▼レコメンデーションアイテム

- ① スポット＝恵比寿 東京ムーズ
- ② サウンド＝サビア・クガートのルンバ、チャチャチャヤ

3. ラブ マシン

アモール ヒロスケの部屋

クラブ「ディーブ」でDJプレイをしているかと思えば、いきなりチャンスレコードから「一発大逆転/アモールヒロスケ&ラブマシン」のアルバムをリリース、本誌お誕生日コーナーのイラストでもお馴染みの売れっ子イラストレーターのは、とにかく多忙な毎日を送っている。その彼が目下のところナゴミにしているものは、ヘトヘトになって家に帰らぬ時、その疲れを取り除いてくれるようなほつくりとした音楽を探し当て、ゆつくりくつろいで聴き入

るつもりだ。

▼レコメンデーションアイテム

- ① スポット＝恵比寿力チャトラ
- ② サウンド＝スライ&ファミリーストーンの「ケ・セラ・セラ」やバット・ウィリアムスの「ハウス・イット・イット・イズ」

4. タイム・ストッパーズ

ドドンバ村井の部屋

うちの相方曰く、ナゴミは北大路橋より北に位置する賀茂川の河川敷に腰を降し、せせらぎを聞くことらしい。柄にもないので我々らしく歌謡曲で解答するように命ずると、ヘトヘトとタビデの「ナゴミの夢」や、ちあきなごみの「喝采」がでてきて訳が判らなくなつたので取材を打ち切った。

▼レコメンデーションアイテム

- ① スポット＝日本の秘湯といわれる所ならどこでも
- ② サウンド＝かまやつひろし作曲の「はじめ人間ギャートルズ」のエンディングテーマ、「やつらの足音のバラード」

5. フィフス・ガーデン

コモエスタ八重樫の部屋

私の老師的存在の八重樫氏曰く「昔前のナゴミは、インテリアはこうで、部屋着はこれで、朝にはアールグレイのお茶で、こつエリックサティを聞かねばならないといったようなファッション雑誌的なナゴミがあった。ブライアン・イーノがナゴミを極めたかのように環境音楽として騒がれた。しかしどれもスタイルとしてのナゴミ感が前に出ていて、本当のナゴミとは言えなかつたと語っている。端的に言えば、今のナゴミはハードな社会に対してどつかへ逃避できるような楽のようなもの。ナゴミに対するものが必ずしも音楽だけではなくなってきたと実感できるようになったとも言おう。クラブ系音楽をプレイする行為は、ひとまずその音楽をデカイ音で聞くことによって、ナゴミそのものがどついついものなかを再確認

する作業に他ならないと言つた。

6. アフロブルー

内川正彦の部屋

優れたナゴミ場所というものはすでに随分前からここに存在している。にもかかわらずそこが和む場所に見えない理由は、誰もそこがナゴミを目的として足を運んでいないからである。人々がナゴミ場所として理解を示しさえすれば、そこは立派なナゴミ場所を形成するはずである。八重樫氏は、そのことを裏付けるかのように、東京は「TBS」横にある喫茶店「戀」と京都は「イノダコーヒ」本店や名曲喫茶「みゆうず」でのナゴミ観を語った。ナゴミとは意外にも身近な所に潜んでいるものらしい。

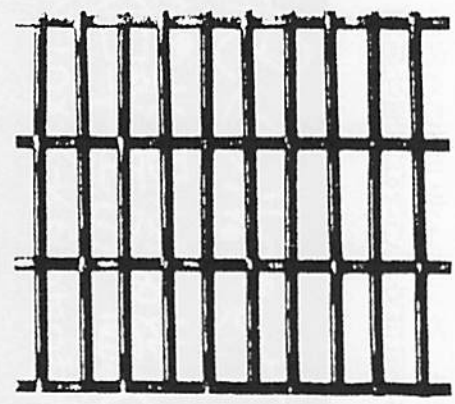
▼レコメンデーションアイテム

- ① スポット＝都立大学横のジャズ喫茶、エポニー
- ② サウンド＝エミット・ローズやピーター・ローワンに代表される、70年代初頭のフォーク系ソフトロック、またはフィフス・ガーデンの「タイムブレイス オケ

今、ナゴミ系のハコ創りをこの町で真剣に考えているといえは、彼の名が筆頭に挙げられる。彼はクラブに対するダンスフロアの必要性や、ポリウムゾーンを意識しすぎたジャンル設定、お決まりの演出法に疑問を頂きこの店を創造したのだが、いやア自分で状況設定が出来ないでつい安心記号へ向つてしまふ連中が多いというの、頭に情報を蓄積しようとしていないのか、この町にはまだまだそれを理解しようとする大人が少ないのが残念でならない。ここではあえて多くを語らないがこの店を使いこなした時、現代のナゴミが少しは判るのではないだろうか。

▼レコメンデーションアイテム

- ① スポット＝クラブ青山
- ② サウンド＝マンドレイク・ソング今回はマニアックな内容でごめんちゃい。

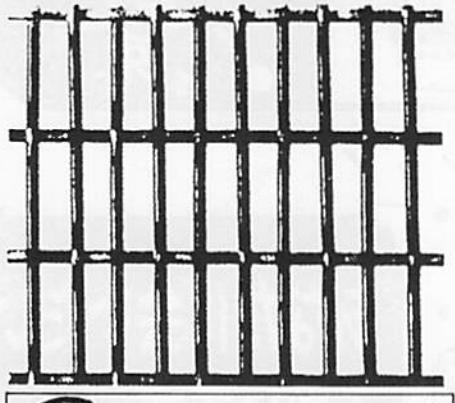


本格派西洋占いショップ

- マダム セイラの神秘タロット占い
- マダム セイラの細密ホロスコープ占い
- コンピュータ占い各種
- 世界のタロットカード
- 占いと魔術の専門書籍
- パワーストーン

一小さな占い研究所ー
ミステリーアート

河原町三条下ルBALビル北側東入ル80m
TEL075・256・4636 営業時間14:00~22:00



レンタルテレホン

月々2,000円

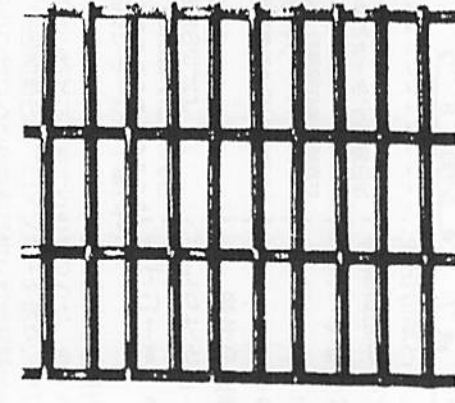
保証金不要
(解約自由)

(フリーダイヤル通話料無料)

0120-280-280

ベストテレホンセンター

京都市北区小山西元町2番地



【TEXT】
モックンカズロー
DJユニット「タイムストッパーズ」主宰。最近では、ナゴミ系のクラブ「アフロブルー」でサウンドインボックスと共に月曜を担当する他、来年必ずそのブームが来ると言われている歌謡曲文化をまずはこの関西圏に広めようと、宣教師として地まなひ啓蒙活動を行っている。

